

しょうがいしゃ じりつせいかつじょうほう  
障害者の自立生活情報

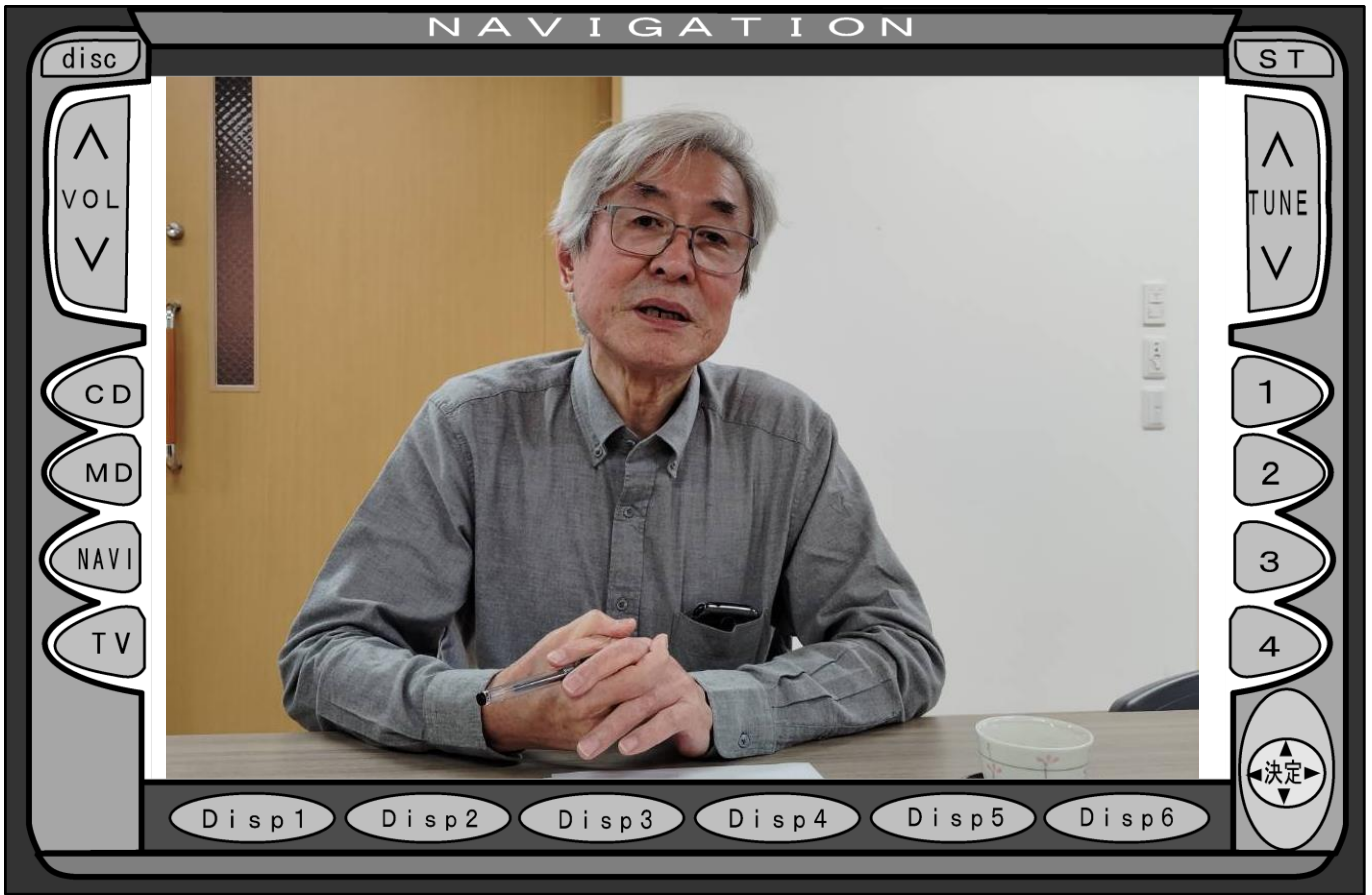
ナンバー  
No.75

(2024年<sup>ねん</sup>3月<sup>がつ</sup>号)



# ナビゲーション

じりつ みち あん ない  
自立への道案内



こんかい しゅざい きょうりょく なかきた きよし  
今回、取材にご協力いただいた中北 清さんです。

## もくじ

- シリーズ いろんなテーマの「なぜ」を<sup>かいしょう</sup>解消！ <sup>なかきたけんちくじむしょ</sup>中北建築事務所 <sup>なかきた きよし</sup>中北 清さん..... 2
- ~Sevenメッセージ~ <sup>おおさかしりつこうせいりょういく</sup>大阪市立更生療育センター <sup>かわばた まさつぐ</sup>川端 正嗣さん..... 8
- 落語家さんにインタビュー..... 11
- 届<sup>とど</sup>いていますか？ <sup>かいごにんつきむりょうじょうしやしょう</sup>介護人付無料乗車証 <sup>たんどくじょうしやか</sup>(単独乗車可) <sup>しやう</sup>の使用についてのお知らせ..... 15
- 編集後記..... 16

# シリーズ いろいろなテーマの「なぜ」を解消!

このコーナーでは教育、施設、交通など各分野に詳しい人にインタビューをしていき、当時の障害者の状況、制度はどう変わってきたのか? 今、取り組んでいること、これからの課題はなにか、など語ってもらうというコーナーです。今回は、中北建築事務所の中北清さんにお話をうかがいました。

名前：中北 清

所属：中北建築事務所

趣味：スケッチ

## ～親とは違う世界へ～

山下：今回のナビゲーションでは、NPO 法人ちゅうぶの監事をしていただいている、中北さんに、建築士から見たバリアフリーのことを中心にお話を伺いたしたいと思います。よろしくお願ひします。

中北：よろしくお願ひします。

山下：さっそくですが、まず、建築士になるきっかけを教えてくださいませんか?

中北：生まれたのが大阪の曾根崎なんです。親父が薬局をしていました。幼稚園まで曾根崎で生活していて、小学校に上がる時に兵庫県の西宮市に引っ越しをしました。中古の家に引っ越しして、住みながら増改築している間に、大工さんの姿を見て興味をもちました。もともと物作りや絵を描くのが好きだったんです。

山下：僕の父親は建築士ではないですが、仕事上、鉋や金槌など使う機会があったので、鉋の削る音とか木の匂い

は好きでした。

中北：当時は、今と違って、朝大工さんがきたら鉋や、のみを研いだり、木を鉋で削ったり、そういう準備作業に昼ぐらいまでかけるんですよね。

山下：お父さんは、どんな仕事をしてましたか?

中北：親父は薬剤師で薬局を経営していました。僕の兄弟は6人兄弟なんです。親父は「この仕事はお前たちは継ぐな。薬剤師は本来薬を作ることもあるが、そのうち薬を売るだけになるから創造性はなくなる。お前たちはそれぞれ好きなこと見つけろ。」と言いました。だから兄弟誰も継いでません。建築士を目指すきっかけは、今思えば小学校の時の体験だったと思います。

山下：学生時代ずっと建築士になりたいと思ってたんですか?

中北：中学、高校の時は、あんまり思っ

いみせんでしたが、<sup>だいがくじゅけん</sup>大学受験するとき  
に、<sup>しぼう</sup>志望の<sup>がく</sup>学科をいくつか<sup>き</sup>決めないと  
いけないので<sup>かんが</sup>考えて、<sup>けんちくがく</sup>建築学科を受  
けようと<sup>おやちが</sup>決めました。親とは<sup>あたら</sup>違う、新  
しい<sup>せかい</sup>世界を<sup>めざ</sup>目指そうかなと<sup>おも</sup>思いまし  
た。

やました  
山下：これまで、<sup>けんちく</sup>どんな<sup>せつけい</sup>建築を設計してき  
ましたか？

なかきた  
中北：25歳で<sup>けんちくし</sup>建築士な<sup>はんせい</sup>ったので半世紀をち  
よつと<sup>こ</sup>超えた<sup>さい</sup>ぐらいです。30歳の<sup>とき</sup>時  
に<sup>どくりつ</sup>独立しました。今は、<sup>いま</sup>ほとんど<sup>いりよう</sup>医療  
と<sup>ふくし</sup>福祉に<sup>とつか</sup>特化した<sup>しごと</sup>仕事をしていま  
す。

やました  
山下：それまでは、<sup>ふくしかんけい</sup>福祉関係<sup>い</sup>以外の<sup>けんちく</sup>建築も  
されて<sup>たん</sup>たんですか？

なかきた  
中北：例えば、<sup>た</sup>バブルの<sup>ころ</sup>頃には<sup>じぶん</sup>自分はほと  
んど<sup>ゴルフ</sup>ゴルフや<sup>らない</sup>けど、<sup>ゴルフ</sup>ゴルフの  
<sup>クラブハウス</sup>クラブハウスを<sup>3</sup>3棟<sup>作り</sup>しました。  
その<sup>ご</sup>後は、<sup>ふくしかんけい</sup>福祉関係<sup>では</sup>では、<sup>しょうがいしゃ</sup>障害者の  
<sup>せいかつかいご</sup>生活介護<sup>しゆうろうけいぞくしえんえーがた</sup>や就労  
<sup>けいぞくしえんびーがた</sup>継続支援B型、<sup>グループホーム</sup>グループホームなど  
の<sup>せいかつしせつ</sup>生活施設、<sup>それと</sup>それと、<sup>いま</sup>もう今は<sup>つく</sup>作ら  
ない<sup>です</sup>けど<sup>にゅうしょしせつ</sup>入所施設<sup>をつく</sup>を作った<sup>じだい</sup>時代  
もあり<sup>ました</sup>ました。医療<sup>いりようかんけい</sup>関係<sup>では</sup>では<sup>りよういく</sup>療育セ  
ンター<sup>せいしんいりよう</sup>や<sup>たずさ</sup>精神医療<sup>にも</sup>にも携<sup>わって</sup>わってき  
ました。



## ～ワークワークバランス～

やました  
山下：<sup>たき</sup>多岐に<sup>わた</sup>わたって<sup>いろ</sup>いろい<sup>ろ</sup>ろな<sup>たてもの</sup>建物を  
<sup>けんちく</sup>建築<sup>されて</sup>されてきた<sup>たん</sup>たんです<sup>ね</sup>ね。<sup>ふくしかんけい</sup>福祉関係  
の<sup>たてもの</sup>建物を<sup>つく</sup>作る<sup>うえ</sup>上で、<sup>むずか</sup>難しい<sup>こと</sup>ことはあ  
ります<sup>か</sup>か？

なかきた  
中北：<sup>しょうがいふくし</sup>障害福祉<sup>は</sup>は<sup>ほうじん</sup>法人の<sup>りねん</sup>理念<sup>きほん</sup>基本<sup>ほうしん</sup>方針、<sup>しょうがい</sup>障害  
<sup>しゅべつ</sup>種別<sup>によ</sup>よっても<sup>ちが</sup>違<sup>う</sup>うん<sup>です</sup>です<sup>よ</sup>よね。そ  
<sup>こ</sup>こが<sup>な</sup>な<sup>かなか</sup>かなか、<sup>むずか</sup>難しい<sup>ところ</sup>ところです。  
<sup>くるま</sup>車<sup>いす</sup>いすの<sup>かた</sup>方<sup>ちてき</sup>や<sup>ちてき</sup>知的<sup>しょうがい</sup>障害、<sup>せいしん</sup>精神<sup>しょうがい</sup>障害の  
<sup>かた</sup>方も<sup>いて</sup>いて、<sup>たと</sup>例えば、<sup>ちてき</sup>知的<sup>しょうがい</sup>障害の<sup>しせつ</sup>施設<sup>で</sup>で  
<sup>トイレ</sup>トイレを<sup>けいかく</sup>計画<sup>する</sup>する<sup>のに</sup>のに、<sup>しょうがい</sup>障害の<sup>とくせい</sup>特性<sup>で</sup>で  
<sup>みず</sup>「水<sup>を</sup>を<sup>い</sup>い<sup>っぱい</sup>ぱい<sup>流</sup>流<sup>して</sup>して<sup>しま</sup>ま<sup>う</sup>う<sup>ので</sup>ので、  
<sup>カラン</sup>カランを<sup>ひつよう</sup>必要な<sup>とき</sup>時に<sup>だけ</sup>だけ<sup>使</sup>使<sup>える</sup>える<sup>よう</sup>よう  
に<sup>かいぞう</sup>改造<sup>して</sup>して<sup>ほ</sup>ほ<sup>しい</sup>しい。」<sup>という</sup>という<sup>ようぼう</sup>要望<sup>も</sup>もあ  
り<sup>ました</sup>ました。<sup>せいしんいりよう</sup>精神<sup>いりよう</sup>医療<sup>でも</sup>でも、<sup>みずちゆうどく</sup>水中<sup>ちゆうどく</sup>毒<sup>で</sup>で、  
<sup>みず</sup>水を<sup>の</sup>飲<sup>み</sup>み<sup>過</sup>過<sup>ぎ</sup>ぎ<sup>て</sup>て<sup>しま</sup>ま<sup>う</sup>う<sup>と</sup>と<sup>か</sup>か<sup>も</sup>も<sup>あ</sup>あ  
り、<sup>その</sup>その<sup>都度</sup>都度、<sup>ぼく</sup>僕<sup>自身</sup>自身が<sup>たいけん</sup>体験<sup>でき</sup>できない<sup>こと</sup>ことで、  
<sup>じぶん</sup>自分が<sup>とうじしゃ</sup>当事者<sup>に</sup>になり<sup>きれ</sup>きれ<sup>ない</sup>ない<sup>ところ</sup>ところ  
が<sup>あ</sup>あ<sup>る</sup>る<sup>わけ</sup>わけ<sup>で</sup>で、<sup>そこ</sup>そこを<sup>どう</sup>どう<sup>りかい</sup>理解<sup>して</sup>してい  
ける<sup>か</sup>かが<sup>ポイント</sup>ポイント<sup>です</sup>です。<sup>いろ</sup>いろ<sup>んな</sup>んな<sup>人</sup>人の  
<sup>はなし</sup>話を<sup>き</sup>聞<sup>いた</sup>たり、<sup>げんば</sup>現場<sup>を</sup>を<sup>み</sup>見<sup>たり</sup>して  
<sup>りかい</sup>理解<sup>を</sup>を<sup>ふか</sup>深<sup>めて</sup>て<sup>い</sup>い<sup>か</sup>か<sup>ない</sup>ない<sup>と</sup>と<sup>ダメ</sup>ダメ<sup>かな</sup>かなと  
おも<sup>います</sup>います。

やました  
山下：<sup>けんちくし</sup>建築士<sup>にな</sup>なって<sup>よ</sup>よ<sup>か</sup>か<sup>った</sup>った<sup>こと</sup>ことを<sup>おし</sup>教えて  
く<sup>だ</sup>だ<sup>さい</sup>さい

なかきた  
中北：<sup>じぶん</sup>自分が<sup>す</sup>好き<sup>で</sup>で<sup>けんちく</sup>建築<sup>を</sup>を<sup>や</sup>や<sup>ら</sup>ら<sup>う</sup>う<sup>と</sup>と<sup>き</sup>決<sup>めて</sup>て  
<sup>はじめ</sup>始めた<sup>こと</sup>こと<sup>です</sup>です<sup>から</sup>から、<sup>いま</sup>今<sup>さら</sup>さら<sup>もんく</sup>文句<sup>が</sup>が  
<sup>い</sup>言<sup>え</sup>え<sup>ない</sup>ない<sup>ん</sup>ん<sup>です</sup>です<sup>が</sup>が、<sup>わらい</sup>（笑）、<sup>いえ</sup>家を<sup>た</sup>建て  
る<sup>に</sup>にしても、<sup>ひと</sup>人が<sup>いちばん</sup>一番<sup>げんき</sup>元気<sup>な</sup>な<sup>とき</sup>時<sup>じゃ</sup>じゃ  
ない<sup>です</sup>ですか、<sup>きぎょう</sup>企業<sup>でも</sup>でも<sup>あたら</sup>新しく<sup>ビル</sup>ビルを  
<sup>た</sup>建て<sup>ると</sup>とか、<sup>こうじよう</sup>工場<sup>を</sup>を<sup>お</sup>起<sup>こ</sup>こ<sup>し</sup>したり<sup>する</sup>する  
<sup>とき</sup>時は<sup>ぎょうせき</sup>業績<sup>が</sup>が<sup>い</sup>いい<sup>とき</sup>時。<sup>だから</sup>だから、<sup>いちばん</sup>一番<sup>げんき</sup>元気<sup>の</sup>の  
<sup>ある</sup>ある<sup>ピーク</sup>ピーク<sup>の人</sup>の人<sup>たち</sup>たち<sup>と</sup>と<sup>つきあ</sup>付き合<sup>って</sup>って  
<sup>い</sup>い<sup>ける</sup>ける<sup>仕事</sup>仕事<sup>です</sup>です。<sup>ぼく</sup>僕は<sup>しあわ</sup>幸せ<sup>な</sup>な<sup>こと</sup>ことに  
<sup>げんき</sup>元気<sup>な</sup>な<sup>人</sup>人<sup>と</sup>と<sup>つきあ</sup>付き合<sup>って</sup>って<sup>い</sup>い<sup>ける</sup>ける<sup>ん</sup>んです。

それと都度、いろんな土地に行ったり、  
いろんな人と出会いがあります。各地  
の美味しいお酒も飲めるし、おいしい  
ものも食べられる。それと、自分で  
手塩に掛けた物が残っていくという  
ことも、うれしいですね。自分の  
痕跡を残していける。気持ちの元気が  
あれば、いつまでもできる仕事です。  
でも、良いことばかりではありません。  
僕らの仕事って波が激しい。忙しい  
時は徹夜もするが、仕事がないときは  
まったくない。

やました 山下：忙しい時期はありますか？

なかきた 中北：官庁の仕事は受けてないので、決ま  
った時期が忙しい、ということはない  
です。忙しくない時に何をするか  
を見つけないといけない。

やました 山下：建築以外にもされていることがある  
んですか？

なかきた 中北：福祉サービス第三者評価もやってい  
て、実は、そっちの仕事の方が忙し  
いんです。私と2人の息子で建築の  
仕事やってますが、今までは代表  
取締役の僕がどんどん前に出てやっ  
てただけども、そろそろ息子2人に  
任せていこうと思っています。2つ  
の仕事をやるのも良いですよ。今、  
流行でワークライフバランスってい  
うけども、「ワークワークバランス」  
でね。2つ重ねたらこっちの仕事が暇  
だったらもう1つの仕事ができるよ  
うになりますからね。

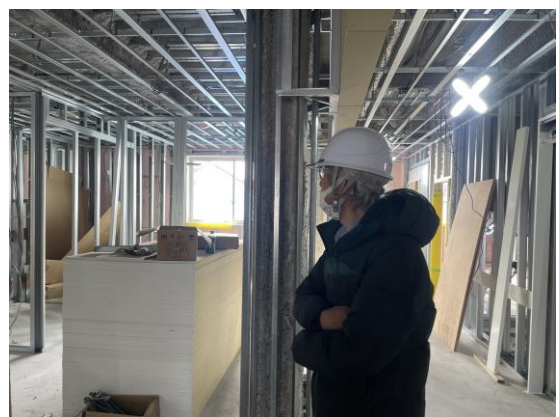
やました 山下：気持ちの切り替えもできそうですね。

なかきた 中北：そうなんです。同じ仕事を24時間や  
るよりも半分ずつに割ったら気持ち

の切り替えもできるじゃないですか。  
そういう点では、うまいこと行っ  
てるなと思っています。世間でも副業  
を認めていたりボランティア活動を  
奨励している会社も増えているみた  
いです。そのことによって人の社会性  
が膨らんで会社によいフィードバッ  
クができる。

やました 山下：そういうことを重視する会社も増え  
ているんですか？

なかきた 中北：増えていると思います。会社の仕事ば  
っかりやっているよりも、会社の外  
に出て、いろんな価値観を持って  
活動することによって気づくことが  
あります。それがまた会社に反映さ  
れる。そういうことに着目し始めて  
るんだと思いますよ。会社の社会  
貢献というだけでなく、むしろそれ  
で会社の活力というか新しいビジ  
ネスチャンスを見つけることができる。



せいしんびょういん ほうもん  
～精神病院に訪問してきました～

やました 山下：ここ2～3年コロナが流行しています  
が、建築をしていく上で変わったこ

とやこういう建物にしてほしいとか  
という要望はありますか？

中北：大きく変わったことはないですが、  
現場の仕事のやりかたは変わりました。  
感染症対策は徹底してますね。  
精神病院では病院の中で患者がコ  
ロナになった場合の隔離室感染者だけ  
を集める病棟を作ったり。職員も  
出入りするけど、どこから防護服に  
着替えて入らなダメとか。そういう  
のはかなり嚴重ですね。

山下：コロナが流行る前はなかったこと  
ですね。精神病院は、コロナの前か  
ら隔離がされてるけどもっときつ  
くなるということですね。

中北：感染症のための隔離病棟であって、  
それまであった精神病院の隔離室  
とは意味が違いますけどね。感染症  
のための隔離病棟は患者さん自身、  
閉じ込められているという意識は  
ないようにしています。部屋からも  
出られるし。今まであった隔離室と  
いうのは部屋から出られない。医療  
の価値観があって必ずしも全部が  
ダメだというわけじゃないけど、僕  
らから見てもおかしい使い方をさ  
れていることが多いですね。

山下：中北さんは施設などに訪問されたこ  
とはあるんですか？

中北：最近時間がなくて行けてないし、コ  
ロナの期間は止まっていたんです  
が、病棟に訪問活動していました。  
大阪精神医療人権センターが取り  
組んでいる、訪問活動メンバーだっ  
たんです。

山下：そうですね。施設を訪問した  
印象はありますか？

中北：コロナ流行前、何回か行った経験で  
は、大きな問題を感じてました。  
患者さんが意味なく隔離されてい  
たので、職員に「どうして隔離して  
いるんですか？」と聞いたら「たま  
たま一般病棟のベッドが空いてなか  
ったから隔離室に入ってもらってる  
んです。」と言われたり。本人が退院  
したいと言ってるのになかなか退院  
させてもらえないということもあり  
ました。主治医は「退院してもいい。」  
と言ってるけど家族が認めないケ  
ースが多いのです。「家族が認めてくれ  
たら退院していいよ。」と医者は言う  
んです。もはや医療的な意味があり  
ません。

山下：それっておかしいですね。

中北：退院したいと思ってる人たちに訪問  
してどうしたら退院できるかとか  
話を聞いて病院にも伝える活動も  
あります。

山下：退院が決まってるんだけど出てから  
の生活のアドバイスなり支援を  
病院がやらない。知らないというこ  
ともあるんですかね。

中北：そうですね。どんなところで住める  
か、どんなところで働けるかなどを  
病院側が知らせないので、私たちが  
調べて情報を伝えたりしないとい  
けない状況です。地域にはいろん  
なサービスがあるじゃないですか。  
その情報が患者に伝えるというこ  
とは病院のソーシャルワーカーが



しないとダメなことですよ。

やました 山下：そのへんが病院は弱いですね。

なかきた 中北：日本の精神医療での問題は病床数が多すぎるのです。厚労省は本腰入れて減らそうとしてるみたいですが。日本の精神医療はほとんど民間だからなかなか動きません。

### ～基準というバリアを解いていく～

やました 山下：建築することで心がけていること

なかきた 中北：我々、建築士が心がけるべきは、法律に規定されていることをおっかけるだけじゃなくて、その法律が何を求めているのかを理解しないとイケない。例えば、バリアフリーについても、様々な当事者にとっての真のニーズに思いを馳せないとダメやと思います。法律に定めてるからやるではなくて、定めてないことやそれ以上を考えていかなアカンこともあります。

やました 山下：法律にあることで矛盾してることもたくさんありますよね。

なかきた 中北：そうですね。実際、法律は最低基準を定めていて、目標基準ではないんですよね。建築基準法とか消防法なども、その規定を目標にする現実があるが、それは最低基準だからそれ以上にならないとほんとうはダメなんですよね。

やました 山下：でも、ゴールになってしまっている。ということですよ。

なかきた 中北：法律には見落としもありますから、基準を超えていかないと、ゴールが本当の意味をなしてないこともある

と思います。一方、法律に準ずることがかえってマイナスな場合もある。建築士がもっと発言して法律にはこう書いてるけど、どうだと言わないといけないと感じています。いろんな住まいとか仕事、学び、遊びとかがみんな融合している街の豊かさ「営みのバリアフリー」。これは日本の原風景なんですよ。それを都市計画が用途を仕分けしてしまったのを元に戻さないといけない。日本の田園風景も崩れ始めている。建築士ができることは「建物を大事に残す。」「新しい使い道を生み出していく。」こういうことが大切やと思います。

やました 山下：建築士が発言していく必要があるということですが、バリアフリーに特化して、他の建築士に伝えていきたいことはありますか？

なかきた 中北：難しいけど、1つに絞れば、何を自分の生きがいというか、生き様にしていくか、人生の一番大事なところをどこに置くかですよ。仕事という概念をもっと、深く考えなおしていく、何をやるかはその時代、時代。あるいは人、ひとりひとり、関心はちがって来ると思うけど、自分の社会における位置付け、これをどこまで高めて発揮できるか、そこに原点を置いたら、何事にも失敗することはない。建築に求められるバリアフリーも、答えは一つではないと思います。基準というバリアを解いて見つけてほしい。

やました 山下：中北さんのお話を聞いて、自分が仕事をしていくうえで何を大切にしていくかを改めて教えてもらったように思います。ありがとうございます。最後の質問をさせてください。座右の銘を教えてください。

なかきた 中北：これまで正直、あんまり、座右の銘を持ってこなかったんですが、最近、読んでる本で、これかなあと思ったのは「自分の真ん中は空洞。」

やました 山下：どういう意味なんですか？

なかきた 中北：自分自身の中から取り出せるものって、実は何もない。むしろ自分自身が外の世界の中にある。だから、自分の中に何かを磨いたり何かを蓄積したり、ということをもう考えない。「自分の真ん中は空洞」という言葉に行き当たってから、気持ちが楽になりました。今76歳ですから、あと20年ぐらいは生きていられると思うので、それでいきたいなと思ってます。気持ちがすごく楽になり、なんかこう、せなあかんということを取り除いてくれたわりには、ずっと前に押し出してくれる言葉なんです。生き方のバリアフリーですね。

やました 山下：ありがとうございます。これからも、いろんなバリアフリー建築物を造ってください。今日は、いろいろ、お話を聞かせていただきありがとうございました

なかきた 中北：ありがとうございました。

なかきた が さくひん  
中北さんが描かれた作品



# せぶん 〜〜〜Seven メッセージ〜〜〜

名前：川端 正嗣

所属：大阪市更生療育センター

(以下：更生療育センター)

趣味：ゴルフ



## 〇理学療法士を目指すきっかけ

高校の時に同級生のお兄さんが理学療法士の養成校に通ってたのがきっかけです。僕らの時って高校2年生の時がちょうど分岐点なんですよ。文系行くか理系行くか2年から3年にあがる時に、文系中心のクラスに行くか理系の方に行くか、それって大学どうするかに繋がってくる。高校2年の時に将来どうしようかという話が友達同士でもあるし同級生に「お兄さんは、どんな仕事してるの?」と聞いたら「理学療法士の養成校いってる・・・。」と。理学療法士って当時、社会的に認知されていない時代でした。理学療法士のことを全然知らないから色々調べてたら、リハビリテーションの専門的なスタッフ。これから、注目される職種です。と書いてあって、それが、40年近く前の話です。それでなんとなく、そういう職種があるんだと友達を介して知って、どんな学校に行ったら、いいのかなと調べはじめて。養成校は近畿の中で4~5校ぐらいしかなかった。ラグビーやっていて怪我をした時にはリハビリをしてたけど、リハビリをしてくれた人が理学療法士だったということは繋がっていなかったけど、ええ仕事かなと。まだ、高校生やし、そんな意識がないというか。超マイナーな職種だったと思います。高校の進路指導の先生に理学療法士の養成校に進むと言ったときに「それなんや!!」って感じの反応されたことを覚えています。そのあと担任の先生をはじめ、学校関係者は私の進路に関して放置(ネグレクト)です。(笑)。僕たちの先輩たちはもっと認知されてなかった時代やと思います。認知度が広まってきたと感じ始めたのは15年ぐらい前からだと思います。あんま師、柔道整復師は認知されていましたが。

## 〇それまでの障害者との関わりは?

学生の頃、クラスに障害がある人がそういえばいてたなあというぐらいでした。障害者とか関わるのは、仕事するようになってからだと思います。いろいろ考えさせられました。養成校卒業して、大阪府堺市の総合病院リハビリテーション科に6年間勤めて、平成8年から更生療育センターで働き始めました。



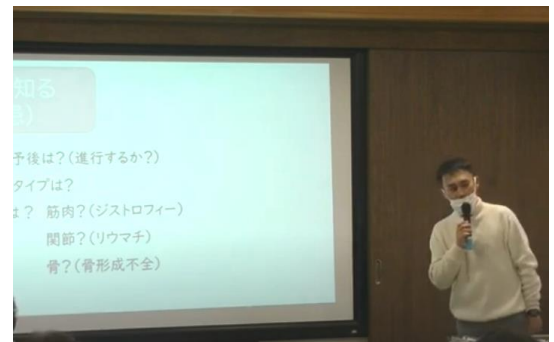
## ○更生療育センターで働くきっかけ

養成校の時に更生療育センターが実習先でお世話になってました。指導していただいた先生に実習終わった後もセンターでイベントや飲み会などがあつたら、誘っていただいたりしてました。若い時でしたから、キャンプやバーベキューやスキーとか誘っていただけることにとても嬉しく感じ参加させていただきました。養成校卒業後、病院に勤務していましたが、更生療育センターとは関係性がつづいていました。病院での勤務の6年目の冬に、ある職員さんから「理学療法士の職員が辞めるから更生療育センターで働かないか。」と誘われて「二つ返事で行きます。」とお答えさせていただきました。

## ○障害者と出会って感じたこと

障害のある人と病院では密に関わることは少なかったです。更生療育センターにお世話になった当時は脳性麻痺の人が比較的多く入所されてました。支援学校を卒業した後に自立を目指す人たちが毎年、春に多い時で6~7人いました。更生療育センター働き出してすぐ、脳性麻痺の男性が入浴時に脱衣場で寝ながらも自分で服を着替える姿を見た時にカルチャーショックを受けました。この世の中に、こういう人たちがいることは本では知っていましたが、リアルに経験することがなかったからです。障害者像が砕けた感じでした。その時なんとなくやけど、僕もこういう人たちに力をもらうんやと後になってわかってきました。更生療育センターで仕事をしていくうちに、理学療法士としての専門性以外にも、いろんな知識・技術を持つ必要性を感じるようになりました。金槌だけやったらアカンな。ノコギリもいるし、釘もいるし。更生療育センターにいる人たちは僕を理学療法士としてだけではなく、一人の支援者として見られていると感じはじめました。病院では患者さんは理学療法士にリハビリの専門性を求めるけど、更生療育センターの入所者の皆さんは、いろんな悩みを相談しに来てくれるから、どう答えていけるか？いろんな事ができるようにならないとダメだと……。理学療法士としての専門性だけを身に着けるだけでは解決しないことが多い事を痛感させられることが多かったです。理学療法士だから……。という考え方がなくなってきた、利用者さんは何を望んでいて、僕は何が出来るのか？どうすれば力になれるのか？ということを考えるようになったんです。利用者さんが求めているのは訓練室でやる訓練だけじゃないですし……。利用者さんのニーズに答えているうちにケースワーカーのような仕事も結果的にやるようになりました。それともう1つ……。今から思うと平下耕三（自立生活夢宙センター）さんとの出会いは大きかったと思います。もう30年ほど前の話になりますが、平下さんが車いす販売の営業をされている時に、僕が勤務している病院に営業に来られたことがあったんですよ。その時「車いす乗ってる人がこんな仕事してるんや！」「車いすの人が就労してるんや！」と印象に残ってました。そ

の時はほとんど話すことはなかったけど、何年かたって、偶然にも二人とも同じ法人に職場がわり、夏のイベントで姿を見かけて、「あの時の営業の人や！」と思い出して、私から声を掛けさせていただいて、色々とお話することができました。その時、改めて「障害者からめっちゃ元気もらえてる。」なんでなんやろう・・・。と不思議な感覚でした。一瞬で好きになったというか・・・。それから平下さんとはご縁があって、施設から地域へという自立生活運動や、障害者が障害者をサポートする世界(現状)を目の当たりにして、私自身の考え方や仕事との向き合い方が変わっていったと思います。平下さんと出会ったことでたくさんの当事者支援をされている方とも出会えました。なかでも当時、ピア大阪で平下さんと一緒にお仕事をされていた東谷さん(自立生活センター・いこら一)から、「障害があることは決してマイナスではない。今は障害者になったことが自分にとって良かったと・・・。」この言葉も私にとっては衝撃でした。障害の向き合い方とか価値観とか、いろんな事が変わっていきましました。そのころから、当事者リーダーが更生療育センターからも・・・。と意識するように仕事をするようになりました。



## ○理学療法士からケースワークに仕事が変わり、

### 大切にしていること、意識していること

今はケースワーカーの仕事が多くて、直接、利用者の身体に触れることが少なくなりました。今は更生療育センターを利用される前に、入院されている患者さんとソーシャルワーカーの方と話をしたり、病院の訪問したり。その時に家族の方ともお話しすることもあります。そこで、家族の方の悩みとか課題に直面したりすることが多いです、ある日、突然一家の大黒柱である夫が脳卒中で倒れて中途障害になると、奥さん、子どもさんも含め、この先どうしたらええんやろと混乱している人が多いです。ご本人だけではなく、家族さんへの支援もしっかりしていかないといけないと思いますが、まだまだ力不足のことが多いと感じています。また、支援を進めていくうえで障壁になる家族様もおられます。親御さんから「一人暮らしまだ早い！」と反対される時には、どうすれば理解してもらえるのか悩むこともあります。ケースワークの仕事をする人が多いですが、意識は変わらず、利用者の皆さんが何を望んでいるのかを大切にしています。

## ○これからこんな社会になってほしいと思うこと

今、とても危惧していることは、介護者の人材不足です。障害のある方が地域で当たり前で生活していくためには、介護者は絶対に必要で、介護者がいなくなったら障害のある方が生活できなくなる現実もあります。僕も定年が近づいてきていますが、そういうところで力になっていけたら、ヘルパーの人材をどう増やしていったらいいのか。「やりがいのある仕事なんだ。」「とても大切な仕事なんだ。」という認知を広めること社会全体で考えていけたら良いと思います。介護職のレスポンス感が社会であまり認識されていないと思います。もっとレスポンスされるべきだと思う。そういう社会になってほしい。子どもが将来、なりたい職業のランキングトップ10に入るぐらい社会になってほしい。夢のような話かもしれませんが。



## ○座右の銘

いっぱいあるんですが、僕が今一番大切にしている他の職員にも伝えていることがあるんです。それは「やらないことほど罪なものはない。」誰かが言っているわけじゃないけど、今の世の中って、何かやって問題が起こったら責められたりして、それやったらやらない方がマシやと思う人多いじゃないですか。やらないと何も変わっていかないし、失敗してもいいやんか、そこから学ぶこともあるし。「やらないことほど罪なものはない」というのは大切にしています。この言葉を表現するようになったのは10年ぐらい前からやけど、自分のやってきたことを振り返ってみたら、この言葉がしっくりくるんです。



## らくごか 落語家さんにインタビュー！！

画期的な落語独演会を紹介します。

様々な取材・原稿執筆・冊子編集をされている、まっすぐプランニング合田 享史さんから目で聴く落語 笑福亭 學光独演会を紹介いただき、この企画を主催された笑福亭 學光さん、合田さん、お笑い福祉士の加藤さん（中途失聴者・芸名：是巢亭臈留）にインタビューさせていただきました。NPOちゅうぶ通信2023年12月、2024年1月合併号の続編で重なる部分もあると思いますがご了承ください。



笑福亭 學光さん

### 【落語家になるきっかけ】

地元・徳島県の銀行を辞めて大阪に来て落語に出会ったこと

です。大阪の上方落語を見て、落語家になりたいなと思うようになりました。銀行員から落語家という180°違う世界に入ったんですが、どちらも「こうぎ（口座・高座）」を大事にします（笑）

※學光さんは「お笑い福祉士の養成もされています」

### 【お笑い福祉士の活動をしてよかったこと】

これまで介護施設や障害者施設に訪問してきました。お笑い福祉士は、様々な考え方があ  
る方たちの集まりなんですね。目的は人に楽しんでもらうこと、笑ってもらうために少し  
でも社会の役に立ちたいという方が集まったグループでもあります。私も少しでもお役に  
立てたらなと思っています

### ☆お笑い福祉士とは☆

笑福亭學光さんが個人で認定している資格

全国各地の福祉施設などを訪問して、落語や手品、腹話術などで笑いを届けるボランティア芸人の称号。創設20年目。全国約600人在籍（障害者のお笑い福祉士も在籍。）

### 【要約筆記やAIを使って独演会を開催しようと思った経緯】

目で聴く落語は、聴覚障害者が落語を楽しむように要約筆記やAIを使い情報保障をするというものです。加藤さん（86歳）が全く聞こえなくなったけど「繫昌亭へ行きたい。」と、いつも言っていたので、加藤さんのために今回の落語会を開こうと思ったのがきっかけ



けでした。合田さんの紹介で、いろいろな人に来ていただけることになりました。

## 【要約筆記やAIでの落語は試みが初めて？】

あべのベルタで試験的にAIを使って3~4回やりました。きっちりした落語会でやるのは今回が初めてです。落語は喋った時の「間」で笑ってくれるので、文字が出ることによってそのタイミングが、ずれたりすると笑いにならないのではという心配がありますが、今回はあえて、1つの壁ではなくて、乗り越えるべきものと思ってやります。

映画には字幕がついてるので落語にも字幕がついても、いい時代になってくるのではないかと思う1つのきっかけですね。

今回、要約筆記は大阪府中途失聴・難聴者協会のみなさん、AIはチームW(ウエスト)研修センターの方に協力いただきました。



かとう 合田  
加藤さんと合田さん

## 【今回のような取り組みを広げていくためには】

他の落語家にも、こういうやり方があると知ってもらいたいし、字幕付きの落語をいろいろな場所でやってほしい。(學光さん)

文字で表示してくれると落語を観やすい。どんどん要約筆記やAIが広まってほしいです。テレビなどで♪太鼓の音と字幕で表示されていることがありますが、太鼓の音などを振動などで表現できるようになるともっとリアルに落語を楽しめると思います。(加藤さん)

## 【障害者と関わる前と関わった後で変わった障害者観】

いろいろな方と出会って、落語会に来てくれたいろいろな障害者の方に来てもらいました。そこでの出会いも最初は徳島県で盲導犬を寄付をされている団体があって、そこで視覚障害者の方との出会いもあって、落語家になってからが障害者と出会うことが多くなりました。統合失調症の方にもお会いしました。障害もいろいろあることも教えてもらったこともありました。知らなかったことがたくさんありました。僕らもそうですし、寝たきりになることもあるやろうし高齢で認知症というのもあるやろうし、本当にみんな何か障害があるんやなということも知りました。本当にまだまだ、知らなかったことが多かったことを障害者の方に教えてもらいました。例えば1つエピソードがあるんですが、大阪府茨木市の福井高校へ行った時に腹話術を指導したことがあるんです。人形作りからストーリー作りから学校の先生が高校2年生の子どもたちに腹話術を学んでもらいたいと。その時に僕は決めていたことがあって高校生が腹話術を馬鹿すると勝手に決めつけてたんです。

福井高校に行って人形作りから始めたんですが、一人一人が違った人形を作ってたんですね。これも決めつけだったんですが、みんな同じような人形を作ってくるだろうと勝手に決めつけたんですが、そうではなかったんです。そこにまず驚きました。そして、ストーリー作りです。就職、親子関係、先生との関係と大きく分けたらある程度ストーリーは分かるんですが、一人一人違うストーリーを作ってくれました。たかが腹話術なんですけども、そういう出会いを作ってくれた腹話術に感謝ですし、そこで子どもたちから学ばせてもらいました。落語の世界に入ってからの方が障害者との出会いは多かったと思います。その中で僕らもたくさん決めつけているところがあって1つ1つ、学ばせてもらったりしました。



### 【実際に落語を観た感想】

- ・私は、テレビで時々、落語を観るぐらいでした。落語を実際に観るのは、おそらく初めて。落語特有の「間」の取り方が面白かったです。
- ・落語を生で聴くことを初めて、寄席の雰囲気も味わえて良かった。
- 要約筆記・AI音声認識の挑戦と聞いて、AIの活用しては、面白いなと思いました。
- ・今は、AIの技術はまだですが、落語の以外の、講演会とか映画とかの、さまざまな分野で活用してほしい。
- 人による入力もパソコン要約筆記はほぼスピードに追いついていた感じ。AI音声認識字幕もあって、両方あるのは面白い。落語自体は、さすがに磨かれた芸。同じような話でも、間の取り方で自然に笑いが起こるのはさすが落語だと実感。聴覚障害の人がどう感じたのかはぜひ聞いてみたい。



舞台上で実際に字幕がうまく投影されるか確認中

とど

## 届いていますか？

### 介護人付無料乗車証(単独乗車可)の使用についてのお知らせ

Osaka Metroが作製している令和5年度分の「介護人付無料乗車証(単独乗車可)」について、3月2日以降、自動改札機にてご使用いただけない可能性があることが判明しました。

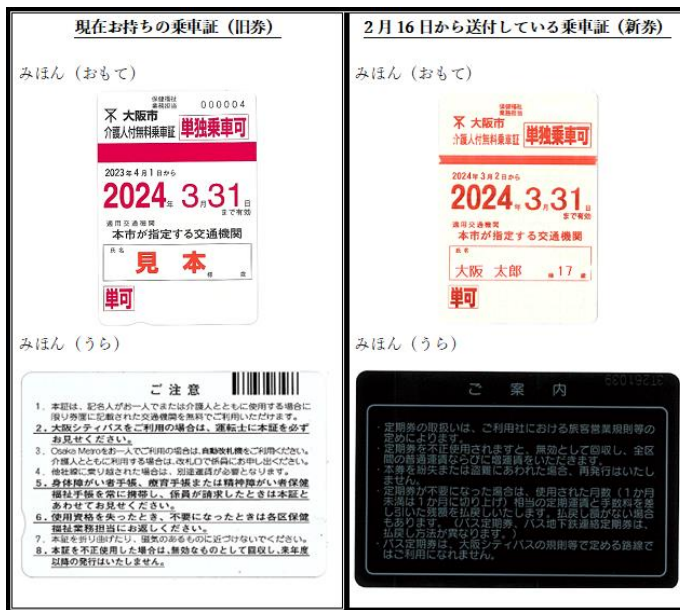
つきましては、2024年3月2日から2024年3月31日までご使用できる乗車証(新券)を、2月16日(金)から簡易書留でお送りしていますので、3月2日以降は新たにお送りする乗車証(新券)を使用してください。

※乗車証の申請時に窓口交付を希望されている方には、ご案内を送付し、お住まいの区役所保健福祉センター窓口で交付します。

※2024(令和6)年1月4日以降に交付を受けた方には正しい乗車証をお渡ししていますので、新たに乗車証は交付しません。現在お持ちの乗車証をそのままご使用いただけます。

2月16日(金)からお送りしている乗車証(新券)の見本

※うら面は、定期券の内容となっていますが、介護人付無料乗車証(単独乗車可)としてご使用いただけます。新券のご使用にあたっては、旧券うら面のご注意にそってご使用をお願いいたします。



### 令和6年度分の乗車証について

令和6年度分(2024年4月1日から2025年3月31日)の乗車証は、別途、令和6年3月中に各区保健福祉センターから交付します。

### お問い合わせ先

Osaka Metro・シティバス案内コール

受付時間 午前8時～午後9時(年中無休)

電話番号 06-6582-1400

FAX番号 06-6585-6466

(大阪市ホームページより抜粋)



